

附属特別支援学校高等部でのLGBTQへの理解の推進

(代表者) 西山 健

(分担者・協力者) 岩崎 弘 ・ 松本 宜明

1.目的

特別支援学校高等部学習指導要領（文部科学省，2019）では、「キャリア教育の充実」が掲げられた。キャリア教育とは，一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育であり，長期間の実習など就業体験活動の機会を積極的に設けることを推進する。つまり，高等部の教育はこれまで以上に就労を意識したワークキャリアの取り組みが重要視されるようになったと言える。

それに伴い，ライフキャリアの取り組みが削減されてしまったことにより，社会生活について学ぶ時間が削減され，性教育については，社会的に重要視されているにもかかわらず校則で異性との交際は禁止（新田，2020）等が報告しているとおり，指導だけで充実した取り組みがなされていない状況であり，ダイバーシティ&インクルージョンの実現に向けて，障害者権利条約のめざす「人間の多様性の尊重を強化すること」という取り組みもなされていない現状となっている。

そこで，本事業では2つの目的に対して実施する。第1の目的は，特別支援学校高等部において，今まで報告例のない性的少数者（LGBTQ）に対する理解を深める実践例を示すこととする。また，その取り組みを実施したことにより，本校高等部生徒が，偏見や差別意識をなくし，一人ひとりが，多様な個性を尊重し合える豊かな心を育み，偏見や差別的な態度をとらないという人格が形成されることを期待する。

さらに，第2の目的として，LGBTQを通して実生活における問題点として性別を問わないトイレについてTOTO株式会社のご担当者様から「考えよう！みんなのパブリックトイレ」というテーマで授業をしていただき，誰もが利用しやすいトイレについて考える。このトイレをきっかけに，みんなが暮らしやすい安心安全な社会の形成について学ぶことと共に，TOTO株式会社の企業紹介もしていただき，企業理念やマーケティング（市場調査と製品開発など）を含んだキャリア教育にも繋げていく。

2.活動の取り組み

(1)対象生徒

道徳の授業にて，習熟度別7名でグループ編成された学習グループにて実践を行った。

授業を行う前に，今までに「LGBT」や「同性愛」、「トランスジェンダー」、「ダイバーシティ」について学習した経験があるかどうかを確認するインタビュー調査を生徒に行った。その結果，「ダイバーシティ」という言葉を聞いたことがあると答えた生徒1名がいた。「今まで学校で学習したことはないが，どこかで聞いたことはあるが，意味はわからない」と答えており，意味を全く理解できていない様子であった。また，「同性愛」という言葉は，聞いたことがあるという生徒は5名おり，「考えがわからない」や「なんか違うような気がする」，「同性愛が良いことかどうかがわからない」など嫌悪を示すような表現があった。

(2) 多様な生き方勉強会(2023年12月5日)

①題材のねらい

特別支援学校高等部学習指導要領における特別の教科 道徳「主として人との関わりに関すること」をもとに、当事者のAさんをゲストティーチャーとして招いて、「当事者のAさんが生徒たちから偏見や差別意識をなく、一人の人として、接すること」を学習のねらいとした。

今回の実践では、今まで「道徳」で取り組んできたことも考慮しながら、実践に取り組む前に担当教員とゲストティーチャーのJUNさんを交えて意見交換を数回行った。その意見交換から、岩崎ら(2022)を踏まえて「高等部の生徒たちにわかってもらいたいこと」として、LGBTについて知ることだけでなく「自分らしく生きることの大切さ(A)」「人のことを思いやる態度(B)」「偏見や差別意識をもたない(C)」「困っている人を気遣う態度(D)」の4項目を抽出し、実践を行うにあたって共通理解を図ることができた。

②展開

展開1:ワーク「これは男の子?女の子?」を行った。「ヒゲが生えている人」や「スカートをはいている人」、「ピンク色が好きな人」等のカードを「男の子」と「女の子」のいずれかを選んで置くという活動を行った。(A、B、C)

展開2:「LGBTって聞いたことがありますか?」という問いを生徒たちに行った。その後、Aさんが「私もLGBTの一人です」と生徒たちに伝え、「私は自分のことを、男でも女でもないと思っています」「好きになる相手もいません」と自分の思っていることを素直に伝えた。(A、B、C)

展開3:「困っていること」と題して、男女それぞれ入口があるトイレと、男女それぞれ入口がある銭湯の脱衣室の写真を映し出して、「どちらにも入りたくない」という気持ちを伝えた。(B、C、D)

展開4:「LGBTでも、そうでなくても、いろんな生き方をしている人がいること」を、イラストを用いて女性同士や男性同士の同性婚のことや、女子高生が制服のスカートではなく制服のズボンを選んで穿いていることを説明した。(A、B、C)

展開5:展開4で説明した人たちに向かって『「おかしいよ」「きもちわるい」なんて言われたら誰でも悲しくなります』と、展開4で説明した人たちだけでなく、言われたすべての人が悲しい気持ちになるだけでなく、「その人の生き方を否定している」ことを伝えた。そして、「自分は困っていなかったり悩んでいなくても、誰かが困っていたり悩んでいることもあります」と自分が困ったり悩んでいないことでも、まわりの人たちは困ったり悩んだりすることもあることを伝えた。(B、C、D)

まとめ:「性別で困っている人に、あなたは、どうしてあげられそうですか?」と問いかけ、Aさんが生徒たちに「私は、他の人と同じように接してもらえると嬉しいです。」と伝えた。(B、D)

振り返り:導入からまとめまでをAさんに行ってもらい、その後、授業者が生徒たちと展開1～まとめまでの振り返りを行いながら、生徒たちの疑問に思ったことや授業者が確認するような質問を行ったりした。(A、B、C、D)

(3) 考えよう!みんなのパブリックトイレ(2024年1月25日)

①題材のねらい

特別支援学校高等部学習指導要領における特別の教科 道徳「主として人との関わりに関すること」をもとに、企業のBさんとCさんをゲストティーチャーとして招いて、「誰もが気持ちよく使えるトイレについて考え、LGBT や多様な利用者配慮への偏見や差別意識をなく、一人の人として、接すること」を学習のねらいとした。

今回の実践では、今まで「道徳」で取り組んできたことも考慮しながら、実践に取り組む前に担当教員とゲストティーチャーのBさんとCさんを交えて意見交換を数回行った。その意見交換から、岩崎ら(2022)を踏まえて「高等部の生徒たちにわかってもらいたいこと」として、前回の授業を踏まえてパブリックトイレの利用について知ることだけでなく「自分らしく生きることの大切さ(A)」「人のことを思いやる態度(B)」「偏見や差別意識をもたない(C)」「困っている人を気遣う態度(D)」の4項目を抽出し、実践を行うにあたって共通理解を図った。

②展開

展開1:「ひとりでも多くの方に心地よく使ってもらうために、トイレはどうあるべきなんだろう?」という問いを生徒たちに行った。(B、D)

展開2:「『パブリック(男女共用)トイレ』を必要としている人の声を知っていますか?」について、父親が幼い娘をトイレに連れて行く時に男性用と女性用のいずれかしか選択できない場合や、LGBT の人も男性用と女性用のいずれかのトイレしか選択できない場合のイラストを用いて説明した。(B、C、D)

展開3:パブリックトイレがあると父親が幼い娘の気持ちは「父親も娘と一緒にトイレに入ると安心」、そして、LGBT の人の気持ちは「性別を問わないトイレだと安心」となることを説明した。(A、B、C、D)

展開4:使う人がトイレを選べる選択肢が増えるように性別を問わずに使えるパブリックトイレの「個室トイレ」を設けていくことも必要であることを説明した。(B、C、D)

展開5:横浜駅のパブリックトイレの外観やトイレの入口、個室トイレの中、車いす使用者優先トイレの中などの写真を見た。(B、C、D)

まとめ:「トイレのあり方はさまざま、正解はひとつではない」「パブリックトイレは、みんなが使う場所。まずは知って考えることから始めよう!」と伝えた。(A、B、C、D)

振り返り:導入からまとめまでをBさんとCさんに行ってもらい、その後、授業者が生徒たちと展開1～まとめまでの振り返りを行いながら、生徒たちの疑問に思ったことや授業者が確認するような質問を行ったりした。(A、B、C、D)

3.活動の成果

(1)「多様な生き方勉強会」の授業前と授業後のアンケート結果

1. 他の人のことについて

質問1 世の中には、差別をされても仕方がない人がいると思う。

思わない(4名 → 4名) ・ どちらともいえない(2名 → 2名) ・ 思う(1名 → 1名)

質問2 人としての価値が低い人は存在する。

思わない(3名 → 5名) ・ どちらともいえない(4名 → 2名) ・ 思う(0名 → 0名)

質問3 つい、馬鹿にしたくなる人がいる。

いない(4名 → 6名) ・ どちらともいえない(3名 → 1名) ・ いる(3名 → 0名)

質問4 自分と考えが異なる意見を理解するように努めている。

理解しようとしている(6名 → 7名) ・ どちらともいえない(1名 → 0名) ・ 理解しようとしていない(0名 → 0名)

質問5 自分と異なる相手を受け入れることができる。

できる(7名 → 6名) ・ どちらともいえない(0名 → 1名) ・ できない(0名 → 0名)

質問6 人の考えや気持ちを積極的に理解しようとは思う。

思う(5名 → 4名) ・ どちらともいえない(2名 → 3名) ・ 思わない(0名 → 0名)

2. マイノリティについて

質問7 女性が男性のようにふるまうことを、理解できない。

理解できる(2名 → 5名) ・ どちらともいえない(4名 → 2名) ・ 理解できない(1名 → 0名)

質問8 女性のようにふるまう男性は、自分を恥ずかしいと思うべきだ。

思うべきではない(2名 → 3名) ・ どちらともいえない(4名 → 3名) ・ 思うべきだ(1名 → 1名)

質問9 自分のことを男性だと思う女性は、おかしいと思う。

おかしくないと思う(3名 → 5名) ・ どちらともいえない(2名 → 2名) ・ おかしいと思う(2名 → 0名)

質問10 女性のような服装をした男性なんて気持ち悪い。

気持ち悪くない(1名 → 2名) ・ どちらともいえない(5名 → 4名) ・ 気持ち悪い(1名 → 1名)

質問11 「男の子は男らしく、女の子は女らしく」という考えは、良いことだと思う。

良いことではないと思う(4名 → 4名) ・ どちらともいえない(1名 → 1名) ・ 良いことだと思う(2名 → 2名)

(2)「考えよう!みんなのパブリックトイレ」の授業前と授業後のアンケート結果

1. こんなトイレがあることを知っていますか?

質問1 くるまいす つか かた たいおう 車椅子を使っている方に対応したトイレがあることを知っていますか。
知っている(7名 → 7名) ・ 知らない(0名 → 0名)

質問2 せいてき かた たいおう 性的マイノリティの方に対応したトイレがあることを知っていますか。
知っている(1名 → 7名) ・ 知らない(6名 → 0名)

質問3 たよう りようしゃはいりよ ひつよう かた たいおう 多様な利用者配慮(ダイバーシティ)が必要な方に対応したトイレがあることを知っていますか。
知っている(1名 → 7名) ・ 知らない(6名 → 0名)

2. 附属特別支援学校のトイレについて答えましょう。

質問4 がっこう せいてき かた たいおう 学校には、性的マイノリティの方に対応したトイレがありません。
がっこう せいてき かた たいおう せっち ほう よ おも この学校にも性的マイノリティの方に対応したトイレを設置した方が良いと思いますか。
はい(4名 → 7名) ・ いいえ(3名 → 0名)

質問5 いま がっこう せいてき かた きも つか おも 今の学校のトイレは、性的マイノリティの方が気持ちよく使えると思いますか。
おも 思える(2名 → 0名) ・ おも 思えない(5名 → 7名)

質問6 いま がっこう りよう せいてき かた ふべん ふまん ふあん かん 今の学校のトイレを利用するにあたり、性的マイノリティの方は、不便・不満・不安を感じると
おも 思いますか。
おも 思える(4名 → 6名) ・ おも 思えない(3名 → 1名)

質問7 がっこう たよう りようしゃはいりよ ひつよう かた たいおう 学校には、多様な利用者配慮(ダイバーシティ)が必要な方に対応したトイレがありません。
がっこう たよう りようしゃはいりよ ひつよう かた たいおう せっち ほう よ おも この学校にも多様な利用者配慮(ダイバーシティ)が必要な方に対応したトイレを設置した方が良いと思いますか。
おも 思える(6名 → 7名) ・ おも 思えない(1名 → 0名)

質問8 いま がっこう たよう りようしゃはいりよ ひつよう かた きも つか 今の学校のトイレは、多様な利用者配慮(ダイバーシティ)が必要な方が気持ちよく使えると
おも 思いますか。
おも 思える(2名 → 3名) ・ おも 思えない(5名 → 4名)

質問9 いま がっこう りよう たよう りようしゃはいりよ ひつよう かた 今の学校のトイレを利用するにあたり、多様な利用者配慮(ダイバーシティ)が必要な方は、
ふべん ふまん ふあん かん おも 不便・不満・不安を感じると思いますか。
おも 思える(4名 → 5名) ・ おも 思えない(3名 → 2名)

4.まとめと今後の課題

「多様な生き方勉強会」については、LGBT 当事者も参加した知的障害特別支援学校高等部の LGBT への理解促進を行うための実践例を示すことができた。そして、当事者の方を招聘し、LGBT について説明を行ったり、体験談を話していただいたりするのではなく、当事者として困っていることや接し方についての気持ちを伝えることが、より効果があることが明らかとなった。

「考えよう！みんなのパブリックトイレ」については、企業と協働しながら知的障害特別支援学校高等部でのパブリックトイレを題材とした LGBT への理解促進を行うためのプログラムを開発することができた。また、前回授業「多様な生き方勉強会」において LGBT の方が話していたことが、身近な題材（トイレ）を通じて、理解が進んだことが明らかとなった。このことにより、前回の授業より、さらに LGBT への理解を深めることができた。

今回の取り組みでは、「自分らしく生きることの大切さ」「人のことを思いやる態度」「偏見や差別意識をもたない」「困っている人を気遣う態度」の4つの観点を踏まえて授業プログラムを作成することにより、「嫌悪」を覚えずに授業を終えることができた。そして何より、生徒たちにとって身近な事例や出来事、習慣などを取り上げながら、プログラムを構成することの必要性が示唆された。

課題としては、今回は特別な教科「道徳」において実践を行ったが、知的障害特別支援学校高等部において、身近な事例や出来事、習慣などを踏まえた授業プログラムを開発していくためには、他教科とも連携したプログラム開発を検討していく重要であることが示唆された。